「あの世」の思考学（２）

2023 年 4 月 11 日記す

１　ある街弁（まちべん）の死（1）

①宗教学の権威だった岸本博士は、降りかかった死の恐怖に苦しみぬいた（「あの世」の思考学（１）３参照）。
対照的に、死を受け入れて逝った友人杉さんの例を紹介する。
杉さんとは司法修習の同期で、麻雀仲間だった。2 人とも当時では珍しく会社勤めの経験があり、わたしは仲間より 5 才、杉さんは 10 才年長だった。

②弁護士になってから、わたしは東京で外資系の大事務所に勤め、彼は大阪で事務所を開き、主に個人の依頼者を顧客にしていた。
2 人とも 30 代だった。わたしが突っ張って仕事をしているのを見て、「矢部ちゃんは国際弁護士、オレは地場に張りつくマチベン」と茶化すのだった。マチベンとは、庶民の相談にのる「街の弁護士」のことらしい。
あれから 50 年近くの付き合いになるが、彼の不機嫌なところを見たことがない。いつも穏やかで気持ちのよい人だった。その印象は終生変わらなかった。

③庶民から元ヤクザまで、庶民派の杉さんのファンは数多い。
政治家の裏人脈のスキャンダルも扱ったし、頼られれば右も左も問わず、来るものは拒まずだった。時に無節操だと批判されたが、スタイルは変えなかった。

④40 代後半になると、わたしは本業と著作で手一杯となり、とても付き合いまで手が回らなかった。生来の孤独癖もあり、かつての仲間との交流も自然と途絶えた。
杉さんと最後に会ってから 10 数年経ったころ、なぜか季節の贈り物をいただくようになった。
毎年、定期便のように、夏には蜂蜜、冬には地元のイノシシ肉が届いた。本来ならわたしの方がお中元やお歳暮を送る立場なので、恐縮してしまった。わたしも故郷の名産品をお返しに送り、その都度、近況を長い手紙にしたためた。

⑤だが、何よりもありがたかったのは、新著を送るたびに、すぐに感想をいただいたことだった。わたしの著書は、一応ビジネス書だが、仏教や哲学の引用も多い。手軽には読めない

のに、杉さんからは一味違ったピリッとしたコメントが返ってきた。コメントには、いつも彼の生き方が反映していた。ありがたい読者だった。
お互いに忙しかったので直接会う機会もなく、年賀状と定期の贈り物の交換だけが唯一の交流だった。

２　ある街弁（まちべん）の死（2）

①こうして定期便は 20 年以上続いた。
数年前、杉さんからお中元とお歳暮をやめたいと連絡があった。始まったときと同様、彼には何かの考えがあるのだろうと、あまり気にしなかった。以来、年賀状だけが唯一の連絡だった。

②だが、気にかかることが続いた。
久方ぶりに新著を送っても、杉さんから何の返事もなく、2 年ほど経ってから短い感想が返ってきた。
読み込むには気力も体力もいる。それでも 2 年もかかったのは尋常ではないし、感想がやけに短いのも異例だった。読んでくれたのはありがたいが、何かおかしい。それに気づくべきだった。

③そして昨年、突然、奥さんから印刷した葉書が届いた。杉さんが数カ月前亡くなったこと、故人の遺志により葬儀は行わなかったこと、が簡単に記されていた。
黒枠で囲むわけでもなく、死因や亡くなった日時も不明。とりつく島のない「死亡通知」だった。

④わたしはやっと合点がいった。杉さんはそろそろ 80 代半ばだった。おそらく病を得て余命を知り、ここ数年身辺を整理してきたのだ。
徐々に身の回りを整理し、終活の総仕上げとして、死後も世俗の形式化した葬儀を拒否した。すべては覚悟の上であろう。死に方についても葬儀についても、静かに、しかしはっきりと自分の考えを貫いたのだ。

⑤長い付き合いを通じて、改まって人生を語ることなどなかったが、彼は並の人ではないと感じていた。その理由が始めて分かった気がした。それと口には出さないが、彼は確固とした死生観を持っていたのだ。やはり敬愛した先輩だった。

⑥彼は終生マチベンとして生きた。他人の賞賛を求めず、自らの道を淡々と歩んできた。行雲流水（こううんりゅうすい）のような人だった。行く雲、流れる水のように物事に執着せず、恬淡として生きてきた。ベタベタした付き合いではなかったが、わたしにはそれが気持ちよかった。

⑦杉さんの死を知った仲間からは、追悼の動きがあったが、わたしは一切関わらなかった。弔電や香典や墓参りなど何になろう。故人の意思は明確で、同年代の奥さんもそれを尊重しているのだ。他人が何を今さら騒ぐこともない。
墓もあるのかどうか。まさかとは思うが、遺骨は海へ散骨したかも知れず、樹木葬をしたかも知れない。

⑧結局、わたしは何もしなかった。50 年に及ぶ友情に感謝するとともに、ただ一人懐かしく杉さんを偲ぶばかりである。実際、杉さんの厚情に対しそれ以上何ができようか。
万物は生まれ、変化し、やがて消滅する。宇宙から見れば、生命はかりそめの状態にすぎない。人の誕生も死も、宇宙にとっては見慣れた風景にすぎない。

できればわたしも、杉さんを見習いたいものである。死者は生者を走らすことなく、静かに消えたいものである。

３　死は幸福かも知れない

①古代ギリシャの哲人たちは、現代人のようには死を恐れていなかった。彼らはひたすら論理的に死に対処した。
ソクラテス最後が好例である。ソクラテス（BC 469 ころ―BC 399）は 70 才のとき、異端の神々を信じ若者を堕落させた罪で裁判にかけられ、死刑の宣告を受けた。獄中にいる間に逃亡を勧められたが、拒否して自分の信条に殉ずる道を選んだ。

②メトロポリタン美術館（ニューヨーク）で、ジャック＝ルイ・ダヴィッド作（1787 年）の『ソクラテスの死』を見たことがある。ベッドに半身で座り、今まさに毒杯を仰ごうとするソクラテスを友人や弟子が取り囲む。ある者は背を向け、ある者は目を伏せ、ある者はソクラテスに取り縋る。

③嘆き悲しむ弟子たちに対し、ソクラテスは、「死を恐れる人びとは間違っている。死を恐

れるのは無知のせいである」と驚くような説示をした。

> 死は人間にとって最大の幸福かも知れないのに、人は死を最大の悪であると決めてかかって恐れている。だが、死はまったくの虚無に還ることか、それとも、この世からあの世への霊の移転である。いずれも恐れることはない（プラトン『ソクラテスの弁明』）。

④死に臨んで最後の言葉を吐く。

> この世を旅立つときが来た。われわれはお互いの道を行く。わたしは死へ、君たちは生の道へと。いずれがよいものであるか、それは神のみぞ知りたもう。

こうしてソクラテスは、あたかも水浴するかのように、平然と毒杯を仰いだ。

４　花園の哲学者エピクロス

（出典：ウィキペディア）

①あの世があるかないか。ソクラテスの考えははっきりしないが、2300 年前、死の恐怖を軽々と見切った天才がいた。ソクラテスが死んでほぼ 60 年後に生まれたエピクロス（BC 341 ころ - BC 270）である。彼は来世をはっきりと否定した。
彼は庭付きの学園（エピクロスの園）で弟子たちと共同生活をしていたので、「花園の哲学者」と呼ばれた。

②当時、死は日常茶飯事だった。死はどこにでも転がっていた。死は見ることも、聞くことも、触ることもできない。感覚外の出来事である。それなのに人はなぜ死を恐れるのか。

エピクロスは驚くべき論理をもち出す。

死を恐れることはない。われわれが生きているときに死は存在せず、死が存在するときは、われわれはもはや存在しない。

③お釈迦様もソクラテスも「死を恐れることはない」と教えたが、「死は存在しない」とまでは徹底していない。エピクロスの言語感覚は突出していた。
この教えを知ったとき、わたしは始め屁理屈だと思った。彼の考えを論理的に破るのは難しいが、何か胡散臭い。洒落た言いまわしの類いで、とても哲学とはいえないと思った。

④しかし、彼の教えは単なる気の利いたエピグラムではなかった。
彼は死の不安から人間を解放しようとした。「死の不安」から解放されれば、「心の平安」を得て、よく生きることができる。死を恐れて不安な日々を過ごすより、今をよく生きることに心を費やすべきである。それこそ最善の生き方だとエピクロスは説いた。

⑤エピクロスの論理は、古代の原子論をベースにしていた。
彼は人間も神も霊魂も原子の結合と離散の過程にすぎないと考えた。死は人間を構成する原子が離散した結果だから、死によってすべては消滅する。死を恐れる必要はない。

⑥生命科学者の柳澤桂子さんは、現代科学に照らして、仏教の古典般若心経（はんにゃしんぎょう）を読み直した。
その結果、人も物も、原子の結合の濃淡で説明でき、その結合が濃ければ人となり、結合が薄くなれば死んで空に戻るという（『生きて死ぬ智慧』）。
古臭いと見えた古代の原子論も、現代にも通じていたのだ。

⑦お釈迦様の生まれたのは、ソクラテスと同時期かそれより 100 年～200 年前だが、その死生観はエピクロスの教えを彷彿とさせる。原子の濃淡(結合と離散)により、万物は生まれ、無に帰す。2 人の考えはまるで相似形である。
お釈迦様の得た直感（啓示）とエピクロスの論理は、死に臨むとき二大知的遺産である。

５「死」は幻想である

①しかし、なぜ岸本博士はあれほどまでに「死の観念」に苦しめられたのか。
死が迫ると知ったとき、現代の多くの日本人も博士と同様に苦しむのではないか。

現代日本人は圧倒的に無宗教である。「宗教を信じているか」と聞かれると、「イエス」と答えるだろう。だが、死に直面してあの世が信じきれず周章狼狽(しゅうしょうろうばい)するなら、それは宗教とはいえない。宗教は、何よりも死の恐怖から人を救わなければならないのだから。

②ヒントを与えてくれるのが、フランシス・ベーコン（イギリスの哲学者・法学者・政治家。1561－1626)）である。エピクロスからおよそ 1800 年後に生まれたベーコンは、言葉の本質とその危険性を明らかにした。

言葉を愛するのは、絵を愛するようなものだ。絵の背後には何もない。

言葉の本質は事象のイメージを創り出すことにある。だが、イメージは、脳の描き出した「脳内現象」だから実体がない。何もないところに虚像を描き出す。それが言葉の本質である。死という言葉は幻想である。

③ベーコンが天才と呼ばれたのは、ふだん何気なく使っている言葉の本質を、仮借なく明らかにしたからである。彼は「言葉の向こうには空虚しかない」と端的に暴きだした。
古代ギリシャの哲人たちも、言葉には実体がないと知っていたが、議論は多岐にわたり錯綜した。

④改めて考えると、エピクロスの教えは、原子論と言語論を踏まえた恐ろしく超越的な思索だった。死の向こうには何もないのだ。死が存在するときは、われわれはもはや存在しないのだから。なぜ死を恐れる必要があろうか。
実に哲学の力は凄まじい。現代人の知性は古代ギリシャ人のそれから進歩していない。わたしはこの年になっても、エピクロスを超える死生観をまだ知らない。

⑤だが、そうはいっても、岸本博士や無宗教の現代人にとって、死はやはり恐ろしい。
なぜか。それは、生まれてこの方、われわれは「死は恐ろしい」というイメージを社会から繰り返し刷り込まれてきたからである。
死という言葉を聞いたとき、恐怖のイメージがわれわれの脳内に自動的に浮かんでくる。それは如何ともしがたい。だから、博士も「言葉の呪力」に囚われ、当初、死は実体であると錯覚して苦しみぬいた。

⑥理屈では死を恐れる必要はないが、われわれの感情は死を恐れる。古代から続くこのジレ

ンマをどう解くか。救いはあるのか。どうしたら救われるのか。
救いの道はあるというのが、わたしの今の予感である。この点は追い追い考えて行きたい。
（続く）